慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米国ギャローデット大学のDeaf President Now 運動にみる「大学」と「ろう文化」
Sub Title	"University" and "deaf culture" revealed through Deaf President Now movement at Gallaudet University in the United States
Author	原田, 早春(Harada, Saharu)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2019
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.143 (2019. 3) ,p.179- 202
JaLC DOI	
Abstract	This paper argues the relationship between "university" and "Deaf culture" in the Deaf President Now (DPN) movement in 1988 at Gallaudet University in the United States. The DPN movement was a human rights movement protesting for the first Deaf president of the university. The movement not only gained respect for American Sign Language (ASL) and Deaf people themselves, but also presented to the world Gallaudet University as the center of "Deaf culture" after the movement. However, this was not the origin of Gallaudet University's relationship with "Deaf culture". Gallaudet "University" built its relationship with "Deaf culture" by keeping ASL a teaching language and proving scientifically that ASL was a true language. This historical presence of "Deaf culture" at the university was the backbone of the DPN movement and was the reason why the movement was so influential.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000143-0179

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米国ギャローデット大学の Deaf President Now 運動にみる「大学」と「ろう文化」

原　田　早　春*

"University" and "Deaf Culture" Revealed through Deaf President Now Movement at Gallaudet University in the United States

Saharu Harada

This paper argues the relationship between "university" and "Deaf culture" in the Deaf President Now (DPN) movement in 1988 at Gallaudet University in the United States. The DPN movement was a human rights movement protesting for the first Deaf president of the university. The movement not only gained respect for American Sign Language (ASL) and Deaf people themselves, but also presented to the world Gallaudet University as the center of "Deaf culture" after the movement. However, this was not the origin of Gallaudet University's relationship with "Deaf culture". Gallaudet "University" built its relationship with "Deaf culture" by keeping ASL a teaching language and proving scientifically that ASL was a true language. This historical presence of "Deaf culture" at the university was the backbone of the DPN movement and was the reason why the movement was so influential.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻後期博士課程２年

はじめに

本稿の目的は米国のろう者を対象とするギャローデット大学で 1988 年に起こった Deaf President Now 運動（以下，DPN 運動）をもとに，「大学」と「ろう文化」の関係について考察することである．

ギャローデット大学は 1864 年に設立され，世界で最も早期に障害者を対象に高等教育の機会を提供した機関であり，自らについては「世界で唯一のろう者を対象としたリベラル・アーツ・ユニバーシティ」[1] であると称する．同大学における特に有名な出来事として，1988 年に同大学の学長に初めてろう者を採用することを求める運動として起こった DPN 運動が挙げられる．同運動は「ろう者の公民権運動」[2] として評価され，障害者にとって最も重要な差別禁止法である「障害を持つアメリカ人法（Americans with Disabilities Act）」（1990 年）の成立に大きく寄与したと言われている [3]．そして同運動後に，ギャローデット大学は「ろうコミュニティ（Deaf Community）」や「ろう文化（Deaf Culture）」の中心地として，特に聴者を中心に世界的に認識されるようになった [4]．同大学は DPN 運動を機に，社会的・政治的にも大きな影響力をもつ高等教育機関となったのである．

このようにギャローデット大学にとって転機となった DPN 運動であるが，同運動を対象とする先行研究の中では特にクリステンセンとバーナートによる研究 [5] が代表的である．同研究では，インタビュー調査に基づき，DPN 運動について詳細が記され，その成功要因及び影響について社会学的視点から分析が行われている．その他，同運動と黒人公民権運動との類似性を指摘するユリアン・ボンドの研究 [6], DPN 運動に至るまでの背景と，結果的に学内にもたらした変化について論じているデイビット・アームストロングの研究 [7]，初のろう者の学長となったアービング・K・ジョーダン（以下，ジョーダン）が自ら，同運動がギャローデット大学の学長の役割に与えた影響について論じているもの [8] 等が先行研究として存在する．

しかしこれらの先行研究では，DPN 運動がもたらした影響や成果が強調される傾向にあり，同運動の背景や要因について分析するものは多くない．特に要因についての分析は，先のクリステンセン＆バーナートによる研究に依存することが多く，それも同運動で提示された全要求を満たすことが出来たことを「成功」と見なし，群衆行動（collective action）との相対化において，その要因を社会学的枠組みの中で示すに留まっている[9]．確かに社会学の枠組みから同運動を捉えると，短期間で全ての要求を満たした点は「成功」に値する．しかし DPN 運動はその後，大学内に留まらず，学外の聴者社会にも広く，長期に及ぶ影響を残している．後に詳しく述べるが，そうした影響の多くは，ろう者の「文化」観が反映されたものであった．加えて，DPN 運動はろう者のための大学を，ろう者自らの手で治めるという目的達成に向け，抗議者が，ろう者固有の文化を主張しながら，自らをマイノリティ・グループとして認識してもらえるよう働きかける運動でもあった．こうしたことからも同運動自体，その場の条件が揃った結果として突如勃発したわけではなく，その裏にろう者の「文化」に関する歴史的背景を伴うものであったことが認められる．つまり，社会学的知見からクリステンセン＆バーナートが示した成功要因は，運動の背景にある歴史性を反映させていない点において，不十分である事が指摘出来る．

では，DPN 運動の舞台となったギャローデット大学はその長い歴史の中で，ろう者の「文化」，即ち「ろう文化」との間に，一体どのような繋がりを有していたのか．こうした「大学」と「ろう文化」の関係について考察をすることが，DPN 運動がもたらした影響についての必然性や，同運動以降ギャローデット大学が，「ろうコミュニティ」や「ろう文化」の中心地として，世界的に認識されるようになる正当性を示す上でも，必要になると考えられる．それにも関わらず，DPN 運動の背景や要因として，「大学」と「ろう文化」の歴史的な繋がりや関係については，従来研究に

おいて考察されていないのである[10]．このような検討を踏まえ，本稿では DPN 運動の歴史的な背景としてのギャローデット「大学」と「ろう文化」の関係について考察することを試みる．

本稿では，DPN 運動，「ろう文化」，ギャローデット大学の歴史についての書籍・文献の検討を通して文献研究を行う．構成は次の通りである．1 章では，本稿のキーワードでもあるアメリカの「ろう文化」とは何か，アメリカのろう者の「文化」の起源を踏まえた上で，キャロル・パッデンの定義を確認する．2 章では，DPN 運動の概要と同運動がもたらした影響について，「ろう文化」観が反映されているものに限定してまとめる．3 章では，ギャローデット大学の「大学」としての歩みについて，「教育」と「研究」という機能を視点に整理し，ギャローデット「大学」が「ろう文化」をどのように継承してきたかを示す．そしてそれらの実践が意図的・選択的行為であったかを検討した上で，「大学」と「ろう文化」の関係について考察し，その関係を DPN 運動の背景として見出す．最後に本研究のまとめと残された課題を述べる．

1. アメリカの「ろう文化」

1-1. アメリカのろう者の「文化」

本章では，本稿のキーワードでもあるアメリカの「ろう文化」について理解する為，そのディスコースを確認する．「ろう文化（Deaf Culture）」という語自体が学界において現れたのは 1970 年代後半のことであり[11]，ろう者の集団的な生活の記述に関連して「文化」という語が最初に現れるのは，1965 年のウィリアム・ストーキーらの著作[12]の中であるとされている[13]．つまり今日では親しくなった「ろう文化」という語が学問領域において使用されることになったのは，そこまで昔のことでは無い．しかし，「ろう文化」という語が用いられるはるか前より，ろう者の「文化」は存在していたと言われている[14]．

ろう者による集団が生まれ，彼ら独自の「文化」が形成されるようになった牽引力の根源は，学校であったとされる[15]．ギャローデット大学の名前の由来でもあるT.H.ギャローデットが，同朋と1917年コネティカット州ハートフォードに初のろう学校を設立し，アメリカに手話をもたらすことになる．これを機に，19世紀のアメリカでは全寮制ろう学校がろう教育の主流をなすようになった[16]．これらの学校は多数のろう者を集結させ，常時相互に接触させ，「ろう」という単なる身体的な面を越える共通体験をつくり上げていた[17]．19世紀初頭から40年間で20もの学校が誕生し，新世紀が始まる頃にその数は50を超えていた為[18]，これらの学校を拠点にアメリカには多くのろう者のコミュニティが築かれた．また，これらの学校の卒業生は後に教員となり，幼いろうの子どもに接する先輩集団として重要な地位を占め，後輩に模範を示し，文化伝達の役割を果たしたと言う[19]．それ以前のアメリカのろう者の生活に関することはほとんどわかっておらず，当時殆どのろう者は他のろう者との接触をしないまま生涯を遂げたされていることからも，アメリカにおけるろう者集団が築いた「文化」は，19世紀初頭アメリカにろう教育と手話がもたらされてから，顕在化したと読み解くことが出来る[20]．

1-2.「ろう文化」と「ろうコミュニティ」

このようなアメリカろう者の「文化」に関する歴史的前提を認めた上で，「ろう文化（Deaf Culture）」，及びそれと併せて論じられることの多い「ろうコミュニティ（Deaf Community）」についての理解を促す為，本稿ではアメリカのろう者の言語学者であり，アメリカで「ろう文化」について明確な定義を行った第一人者である，キャロル・パッデンの定義[21]に従い，本節で簡単にその内容をみていく．

パッデンは，「文化」と「コミュニティ」を区別した上で[22]，「ろうコミュニティ」を次のように定義している．

> ろうコミュニティとは，任意の場所に住みながら，その地域の人びとと共通する目的を有し，さまざまな方法でこれらの目的を達成しようとしている人びとの集団である．ろうコミュニティは，ろう（Deaf）ではないが，ろうコミュニティの目的を積極的に支持し，それらを達成するためにろう（Deaf）者とともに働く人びとも含む．（中略）ろうコミュニティにはろう（Deaf）の人だけでなく，聴者とともに文化的にろう（Deaf）者ではないが耳が聞こえない人びとで，ろう（Deaf）者と日常的に接触し，共通する事柄でろう（Deaf）者とともに働いていると自認する人びとが含まれる[23]．

これに対し「ろう文化」については，

> 耳が聞こえない人びと（deaf）のコミュニティよりも閉鎖的である．ろう（Deaf）文化の成員は，ろう者（Deaf）のように振るまい，ろう者（Deaf）が用いる言語を用い，ろう者（Deaf）が自分たちやろう（Deaf）でない人びとについての信条を共有している[24]．

と，「ろうコミュニティ」との構成員の範囲の相違からそれを定義している．「ろうコミュニティ」にはある任意の場所で目的を共有する者であれば聴者も含まれるが，「ろう文化」では必ずしもそうではなく，構成員が限定される．またこの定義を比較した場合，両者には「言語」の違いがある．パッデンによると「ろうコミュニティ」の構成員は，文化的な背景が異なるものも多い為，使用される「言語」はそれぞれの文化集団に依存する[25]．しかし「ろう文化」においてとりわけ重要な文化価値とされるのはアメリカ手話という「言語」であるため，「ろう文化」内における使用言語は一つであるのだ[26]．このことからも，「ろう文化」の構成員はアメリカ手話に対し，強い一体感と尊敬の念を有していることが分かる．では「ろう文化」の構成員になるにはアメリカ手話を身につければよいのか．

パッデンによると，耳が聞こえないという意味での「ろう（deaf）」であることは，必ずしも集団のアイデンティティの決定要因にはならない．しかし「ろう文化に加入し，ろう者（Deaf）になること」の条件として「ろう（Deaf）としてしかるべき行動様式を身につけること」が挙げられている[27]．そして，この行動様式を形成する中心的な文化価値こそが，先のアメリカ手話なのだという．

以上がパッデンの定義する「ろう文化」,「ろうコミュニティ」である．アメリカの「ろう文化」においてとりわけ重要な文化価値とされるのは「言語」としての手話であることがここでは強調されているが，実際にその他の学問上のろう者の「文化」に関する言説も，「手話」への言及を欠くことは無い．本稿では，19世紀初頭よりアメリカのろう者による「文化」が存在しており，パッデンの述べるよう「ろう文化」の中心的価値が，手話という「言語」にあることを認めた上で，次章ではDPN運動の概要と，同運動がもたらした影響に，どのようにそうした「ろう文化」観が反映されているのかを確認していく．

2. DPN運動について

2-1. DPN運動の概要[28]

本節では先ずDPN運動の概要を確認する．DPN運動は，1988年3月に約1週間にわたって起きた「ろう者の学長を，今（Deaf President Now）」のスローガンを掲げた教授陣・職員・卒業生を含めた学生たちによる抗議運動である．同運動は，戦略的に多くの支援を獲得することで初のろう者の学長を生み出し，アメリカ社会，ひいては世界的にも関心を持たれる出来事であった．

4代目の学長であったエドワード・メリルが1982年に辞任を明らかにした際，ろうコミュニティの一部の人々が，理事会にろう者の学長を選出するよう促し，メリル自身も学長職にふさわしいろう者がいることを提唱

していたが，それから5年間，理事会でろう者が選出されることは無かった[29]．実際にろう者の学長選出が現実的となったのは，1987年8月に6代目学長のジェリー・リーが辞任すると発表した翌年3月1日，地元の起業家による援助のもと，ろう者の学長を求める学生や卒業生，教員等が1500人規模の熱狂的な大集会をキャンパス内で行ったことがきっかけである．この大集会は元々，卒業後に偏見や差別に晒された一部の卒業生が「世界の名だたるろう者の大学であるにも関わらず，ろう者の学長が未だにいないことは侮辱である.」「一般社会にろう者を輩出することを誇りながら，自らの大学運営に関してはろう者に任せない，これは良心があっても真の理解がない学校側の態度が健常者のパターナリズムを反映している.」といった想いを抱いていたことから企画されたのである[30]．

大集会が行われる同日3月1日に，理事会で次期学長の最終候補者として，2人のろう者，1人の聴者が選出された[31]．しかし6日，理事会が最終的に唯一の聴者であるエリザベス・ジンサーを選出した為，人々の怒りが爆発し，この日から抗議運動が活発化することになる．翌日7日から1週間，学生たちはキャンパスを占拠する．大学構内の活動は全て停止され，授業は全てキャンセルされた．学生，教授，職員，卒業生，更には他のアメリカろうコミュニティの人々も抗議に参加し，費用の捻出に助力した．またこの様子はメディアを通じて全米の注目を集めていたこともあり，聴者や地元による支持も幅広く，確実に得ることが出来たのである．

DPN運動においては，学生，教職員の委員会による下記の4つの明確な要求が示されていた．

①第7代学長に指名されたジンサーの決定を取り消し，残りの候補者の内どちらかのろう者の学長を選出すること．

②理事会長ジェーン・スピルマンは直ちに辞職すること．

③新しい理事会の51%（過半数）をろう者にすること．

④これらの要求が実行されても，学生や教職員への報復をしないこと．

後にこの要求は，③の即時履行を除いてすべてが受け入れられることとなる．

キャンパスに入ることが出来ないよう徹底して妨害されていたジンサーは，学長に任命された僅か3日後の3月10日の夜に，辞意を表明することとなった．ジンサーの任命が下され抗議運動が始まった一週間後に理事会が再開され，上の要求がすべて認められた．新たな学長としてジョーダンが選出され，ギャローデット大学史上，初めてのろう者の学長が誕生したのである．

尚，DPN運動を説明する上で特徴的なのは，同運動の採用した「枠組み」である．DPN運動は，障害者運動としてではなく，公民権運動の枠組みを拡張した，ろう者の人権運動であった．従来の障害者運動に当てはめられた枠組みは，障害者を，インペアメントを有する治療の対象として見なし，医学的な問題と結びつけるものであった[32]．それに対しDPN運動では，ろう者を，治療すべき対象としての障害者ではなく，むしろ，一つの文化を有したマイノリティ・グループとして主張した．マイノリティ・グループの人権運動として，既存の公民権運動の枠組みを拡張，適応させたのである．では，こうした戦略が何故選択されたのか．それは，DPN運動の抗議者達が，一般社会に対して幅広く支援を求めていたことが背景にある[33]．1950～60年代は，公民権運動が盛んに行われており，一般社会における誰もがその様相を理解していた．このように，既に市民権を得ていた枠組みを採用することで，DPN運動は一般社会から，より多くの共感と支援を得ることに成功したのである[34]．

以上がDPN運動の概要である．同運動はギャローデット大学を舞台に，1週間にわたって行われた学長抗議デモであったが，戦略的「枠組み」を用いながら，結果的に全ての要望を満たすことを可能とするものであっ

た．

2-2. DPN 運動がもたらした影響[35]

本節では，短期間で結実した DPN 運動が，長期にわたってもたらすことになる「影響」についてみていく．DPN 運動がもたらした「影響」は多岐に及ぶものであるが，本稿の主旨に即して，「ろう文化」観を反映した「影響」に限定し，更にその影響先を「ギャローデット大学内」「ろうコミュニティ」「聴者社会」の 3 つに分類して整理する事とする．なお，前章で確認したパッデンによる「ろう文化」の定義や特徴を踏まえ，DPN 運動がもたらす「ろう文化」観が反映した「影響」とは，その中心価値であるアメリカ手話に関するもの，そしてろう文化の構成員であるろう者（Deaf）そのものへの礼賛が看取されるものとする．

DPN 運動の第一の影響先として，ギャローデット大学学内が挙げられる．その中で「ろう文化」観が反映された影響は大きく分けて 2 つある．一つ目は，ギャローデット大学内においてろう者の教職員が増加し，加えて高いポストに就くろう者が増えたことである．DPN 運動後，学内のろう者の教職員は増加し，現在では半数以上のろう者が採用されている[36]．そして同運動の要求の一つであったように，理事会の役員といった高い地位につくろう者が同運動後増加している事が大きな変化であった[37]．二つ目は，大学内におけるろう者観に関する変化である．中でも特に大きな変化がもたらされたのは，アメリカ手話に関するポリシーである．DPN 運動以前，教授陣の中ではアメリカ手話を使用することが求められていたが，それは「同時コミュニケーション法（simultaneous method of communication）」という方法で，英語の語順，読唇，可能であれば口話がアメリカ手話と同時に求められるものであった．しかしこのシステムは，DPN 運動後変更され，アメリカ手話のもつ文法構造に従って使用することが求められるようになる．アメリカ手話に関するポリシーの変化は，職員に対しても同様に訪れた．以前は採用時，一部の上級職員を除け

ば，ろう者と接する仕事であっても，職員はアメリカ手話を獲得している必要が無かったが，DPN 運動以降全ての職員が，採用時には最低限のアメリカ手話を獲得している事が条件として記載されるようになった[38]．このようにアメリカ手話を一つの「言語」として尊重し，徹底するといった変化が運動後顕れたのである．その他にも，カリキュラム上の影響として，DPN 運動後に，かつては副専攻であった「ろう者学（Deaf Studies）」が新たに主専攻プログラムや学部として設置されるようになり，後に「アメリカ手話」のプログラムも追加されている．

第二に，DPN 運動はアメリカの他の「ろうコミュニティ」にも影響をもたらしている．同運動は，全米のろうコミュニティにおいて数々の，DPN 運動と類似した抗議運動，通称「ミニ DPN 運動」[39] の発生を促し，成功的出来事の拡散をもたらした．ミニ DPN 運動が発生した舞台は，州立の寄宿制のろう学校から，アメリカのろう者を対象とする高等教育機関であり，今日でもギャローデット大学に並ぶ名門校である NTID（National Technical Institute for the Deaf）にまで及んでいる[40]．ミニ DPN 運動で主張されたのは，例えば，1991 年のウィスコンシンろう学校の場合，ろう者の校長を就任させること，ろう者の職員を過半数にすること等であり，結果的に生徒が授業ストライキを行っている．ウィスコンシンでの抗議運動はまた，DPN 運動を模倣しただけでなく，「ろう者であることへの誇り」の増幅を反映させるものでもあったという．またその他，ミニ DPN 運動に分類される抗議運動では，アメリカ手話に基づいたカリキュラムの設置や，教職員によるアメリカ手話の技術不足の解消といった要求がなされている[41]．DPN 運動が「ろうコミュニティ」にもたらした影響としては他にも，DPN 運動の翌年，ギャローデット大学が，ろう者の文化や言語や歴史を祝う，“Deaf Way”という初の国際会議の主催を担い，世界中のろう者を集結させたという出来事等も挙げることができる[42]．

最後に，DPN 運動が最も深い衝撃を与えた第三の影響先として，聴者社会が挙げられる[43]．聴者社会にもたらされた「ろう文化」観を反映した影響，それは，聴者が抱くろう者に対する認識の変化であった．DPN 運動以前，聴者の間では，ろう者は聴者によって支配されなければならない存在であると考えられてきた．しかし同運動に関するメディア報道を通して，ろう者が手話という「言語」を有するマイノリティ・グループであったという主張や，初のろう者の学長を求めて戦略的にデモを行う姿が映し出されたことで，「ろう者は聞くこと以外何でもできる」[44] という認識が，聴者に現実としてつきつけられたのである．後に辞任することとなった，理事長のスピルマンが会合で述べたとされる「ろう者は聴者社会においては未だ機能することが出来ない」[45] という発言を明白に覆すかのように，DPN 運動は，聴者がろう者に抱いていた認識を転換させることに成功した．

以上が，DPN 運動が結果的にもたらした「ろう文化」観が反映した影響である．例えば，同運動後，ギャローデット大学内にろう者の教職員が増加し，それまでは就く事の無かった高いポストに，ろう者が就くようになったという実態や，同様の要求がミニ DPN 運動でもなされたことは，実質聴者によって支配されていた環境から，ろう者自身による管理・運営への転換を指し，以前には無かったろう者への礼賛が顕れるものであったと言える．このろう者への礼賛は，聴者がろう者に対する考えを改めたという認識的変化にも，もちろん看取される．そして，大学内で起こった教職員間におけるアメリカ手話のポリシーの変化や，ミニ DPN 運動においてみられた，教職員によるアメリカ手話の技術不足及びアメリカ手話に基づくカリキュラム設置への要求，そしてろう者の「言語」である手話や文化を祝う，世界会議がギャローデット大学において主催されたという事実等は，「ろう文化」の中心価値であるアメリカ手話に関するものである．また，ろう者と日常的に接触し，共通する事柄でともに働いている聴者が

含まれる，構成員の範囲が広い「ろうコミュニティ」として歴史的に位置づいていたギャローデット大学やろう学校において，アメリカ手話を重んじる「ろう文化」の構成員の増加や，アメリカ手話の尊重が望まれたという点は，「ろう文化」化が期待されるものであったといえる．この点からも，本節で見てきた「影響」の数々は「ろう文化」観を反映したものであった．

ここまでみてきた「影響」からも分かる通り，DPN運動はその場の条件がそろった結果起こったのではなく，運動以前までにギャローデット大学で培われてきた「ろう文化」のルーツ無しでは起こり得なかったと言える．では，ギャローデット大学は「大学」として，DPN運動が起こるまでの間どのようにして「ろう文化」を継承し，その関係を築いてきたのか．そしてそれは選択的・意図的なものであったのか．これらの点について次章で確認していく．

3.「大学」と「ろう文化」

3-1. ギャローデットの「大学」としての歩み

ギャローデット大学は，「ろう文化」とどのように関係を有していたのか．この問いを念頭に本章では，ギャローデット大学の「大学」としての歩みについて，アメリカの大学の使命と言われていた，「教育」「研究」「社会貢献」の三つの機能の内，「教育」及び「研究」という二つの観点から整理していく．

3-1-1. 教育方法

先ずはギャローデット大学の「教育」という観点から，特に「教育方法」に焦点を当ててその過程を見ていく．小規模のリベラル・アーツ・カレッジとして発足したギャローデット大学は，発足当初より今日までB.A.やB.S.学位といったリベラル・アーツ学位を提供し，ろう者のエリートを輩出してきた[46]．ギャローデット大学では，教育内容ではなく，「教

育方法」として，その中心的価値である手話を教授言語にすることで「ろう文化」との関係を築いていく．

1880 年のミラノ会議により，ろう教育では，手話は禁止され，口話と読唇よる指導で実践されるべきである，という宣言がなされた[47]．19 世紀後半の残りと 20 世紀前半は口話主義が優勢にあり，手話の正当性は激しく非難された[48]．しかしそれに反して，ギャローデット大学は手話の伝統を保持する砦として「教育方法」に手話法を維持し続けたのである．その理由として，当時ギャローデット大学の学長であった E.M. ギャローデットが，ろう者にとっての手話は不可欠なものとして尊重されるべきもので，口話教育だけではろう者の大部分を教育することが出来ない，という確信を持っていたことが挙げられる[49]．彼は，父である T.H. ギャローデットの聾唖者観を踏襲していた．それは，ろう者を正常な人間と見なし，「ろう」というものを異常なものとして認識していないというもので，音声で話すことが出来ない，という能力の欠如そのものは認められるものの，それが知的発達の障壁にはならず，むしろ「ろう」という状態にあった教育手段を見つけることが必要であるという立場である[50]．この教育手段こそが手話での教授あったのだ．また彼の考えに加え，開学当初から在籍していた，ろう者の教授陣の存在が，言語遵守にかけた大学の姿勢を実質的に支えていたのである[51]．このような，彼らの手話への尊重から，ギャローデット大学は，ろう者の知識層を手話法で育成する高等教育機関としての姿勢を，堅持したのである．そしてその結果ギャローデット大学では，ろう者が普段から使用する「言語」であり「ろう文化」の核である手話が，教授言語として使用されるという「教育方法」において保持され続けた．そして授業外でも学生たちによって日常的に使用されていたアメリカ手話は，後に「研究」の対象として見出されるようになる．

3-1-2. 研究

では次に，ギャローデット大学の「研究」面はどのように発展したの

か．ろうコミュニティのために，ろう教育やろう者に関する研究を行うということは，設立以来，ギャローデット大学が担う学問的活動であり，教育に次ぐ第二の使命であった[52]．19世紀後半から20世紀初頭にかけては教授陣による個別研究が行われた．例えば，ギャローデット大学の副学長兼外国語学部教授として，50年以上務めたエドワード・フェイは，19世紀後半における，ろう者の結婚と遺伝をめぐる議論について，資料に基づく厳密な研究調査を行い1889年に『アメリカにおけるろう者の結婚』（*Marriage of the Deaf in America*）を執筆した．また，学部長であったアービング・フスフェルドは，教授であったハーバートとピントナーと共に『アメリカのろう学校に関する調査』（*Survey of American Schools for the Deaf*）を1928年に執筆している[53]．これらは，ギャローデットにおける研究の下地となっている．

ギャローデット大学における本格的な研究の組織化，及びその持続的努力は，大学としての認証評価を得ると言う目的を達成する為，1950年代に強調されるようになり[54]，開学100周年である1964年までには，5つの研究ユニットが設立される[55]．これらの研究ユニットはろう教育の実践に大きな影響を与えたが，言語研究ラボ（the Linguistic Research Laboratory: LRL）で行われた，先のウィリアム・ストーキーによる，アメリカ手話の構造についての研究は特に，ろうコミュニティに偉大な功績を残したものとして知られており，同時にギャローデット大学を外の世界と最も接近させるものであった[56]．彼の研究は結果的に，文法体系を持たないと考えられていた手話が，音声言語で見られるのと同様に，英語とは異なる独立した構文と文法を持つ，精緻な自然言語であることを明らかにしたのである[57]．つまりストーキーは，ろう者が独自に「言語」を有することを示し，その言語は音声言語と対等のものであると立証し，ろう者の言語，文化について考えていく上で永続的な成果を残したのである．

3-2. ギャローデット「大学」と「ろう文化」の関係

ここまで,「教育」と「研究」という二つの側面に焦点を当て，ギャローデット大学の歩みを確認してきた．ギャローデットは「大学」として「教育方法」及び「研究」という二つの面で，その中心的価値であるアメリカ手話を維持・発展させることで,「ろう文化」を継承してきたことが分かった．このような歴史的経緯がなければ，DPN 運動以降，ろう者が「ろう（Deaf)」であることに誇りを持つことも，聴者がそれを承認することも無かっただろう．また特に「大学」の機能である「研究」を通して，アメリカ手話に対する科学的な証明がなされたことは,「大学」ならではの文化の継承方法であると言える．

しかしここで重要となるのは，ここまでで見てきた「教育方法」と「研究」による「ろう文化」の継承は，ギャローデット大学によって意図的・選択的に行われてきたのかどうか，という点である．第一に「教育方法」に関して，手話が採用されたことには，初代学長 E.M. ギャローデットの聾唖者観が反映されていることを確認した．実際に，彼は学長として 19 世紀後半に台頭した口話主義のリーダー，アレキサンダー・グラハム・ベルが主張する誤った優生学に基づく「聾という悪い遺伝子を無くす」[58] という考え方に抗う形で「手話」を維持したのだが，実際には口話法をも採用する「併用法」の立場を推奨していた [59]．また，ミラノ会議で口話法が正式にろう教育に使用されるようになってからも，アメリカのろう学校において，ろう児は教室外では手話を使用し続けたという実態がある [60]．この点からは，ギャローデット大学が「手話」を維持したことは選択的行為ではあったが，それは聾唖者の考え方によるものであり，ろう者の「文化」を継承するという意図であったとは言い切れないことが分かる．しかしながら，次にみた大学の「研究」機能において「手話」が研究対象へ移行していくプロセスは，ギャローデット大学において「教育方法」として手話が維持されたことが，きっかけとなったと考えられる．

既に確認した通り，ギャローデット大学ではろう教育やろう者に関する研究を開学当初より学問活動として担ってきたが，1950年代以降，組織的な研究を行うようになるのは，大学としての認証評価を得ると言う目的の為であった．つまり，ろう者に関する事柄として手話を研究対象に見出すこと自体は自然の流れであったが，組織的な研究が行われたこと自体はろう者の「文化」を維持する為のものとして想定されていたわけでは無いだろう．しかし，アメリカ手話が体系的な自然言語であることを示した先のストーキーの研究は，彼が「教育方法」として他の教授陣に教わった手話と，ろうの学生達が教室外で使用している手話に構造的相違がある点に気が付いたことに端を発している[61]．ギャローデット大学ではE.M.ギャローデットによって手話が残されて以降，今日のアメリカ手話とは異なる，英語をもとにした非体系的な手話や指文字が教授陣によって使われていた．しかしながら，学生同士が教室外で用いていたコミュニケーション手段としての手話は，19世紀初頭以降ろうコミュニティにおいて視覚言語として使用されてきた，後にストーキーが文法体系を持つと示した「アメリカ手話」であったのである．つまり，ギャローデット大学において手話を「教育方法」として維持しなければ，学生が教室外で使用する手話との「相違」自体が生まれなかったと考えることが出来る．その違いを信じ，ストーキーは，他の研究者に馬鹿げた研究だと非難されながらも[62]，言語としての「手話」を構造的に明らかにするために邁進した．またここで重要であるのは，こうした「研究」自体，ギャローデット大学でしか為し得なかった，ということである．数多くの幅広い年齢のろう者が集まるセンターが他には無かったことから，ろう者に関する研究を，ギャローデットにおいて行うという機会は，殊に約束されていたという[63]．確かに，アメリカのろうコミュニティの拠点となっていたろう学校においても，アメリカ手話は細々と生き残っていたが，「幅広い年齢」のろう者がそろっている環境を含め，手話を「研究」する設備や条件はそろっていなかった

と考えられる．

以上を踏まえると，特にギャローデット大学が「研究」機能を通して手話を科学的に証明したという事実は，ギャローデット大学と「ろう文化」が歴史的な関係を有していることを示す上で重要であり，一方で手話による「教育方法」の伝統は，手話が「研究」対象となる移行プロセスの契機となっていたことが分かった．そして，ろう者の「文化」の継承を目的とした選択的・意図的な行為では無かったが，ギャローデット大学は，「大学」としてアメリカ手話の維持と科学的証明をもって「ろう文化」を継承してきたという関係が，結果的には成り立っていたということが出来る．加えて「研究」に関して，実質的にそれはギャローデット「大学」でしか為し得なかったという点も，ギャローデット大学と「ろう文化」が歴史的に関係を築いてきた上で欠かせない条件となっていただろう．

以上を踏まえ，改めて「大学」と「ろう文化」の関係を DPN 運動の背景として捉え直してみる．先ずギャローデット大学は，「大学」として，アメリカ手話の維持と科学的証明をもって「ろう文化」を継承してきたという関係が，歴史的に成り立っていたことがわかった．繰り返しになるが，そもそも DPN 運動は，マイノリティ・グループとしてのろう者の人権を主張するものであった．しかしもし，これまで見てきたように，ギャローデット「大学」と「ろう文化」との関係が築かれていなければ，文化集団としての権利を求める上で，アメリカ手話が言語であると言う，ろう者のアイデンティティの根幹を成す部分を主張出来なかったことになる．同時に，ギャローデット学内の学生が，ろう者としてのアイデンティティをそもそも持ち得なかっただろう．このような視点からは，DPN 運動のルーツとしての「大学」と「ろう文化」の関係は，改めて，同運動が数々の「ろう文化」観を伴う影響を生む要因であったと言える．

おわりに

本稿では，アメリカのギャローデット大学で1988年に起こったDPN運動を対象に，「大学」と「ろう文化」の関係について考察を加えてきた．DPN運動はろう者の人権運動という文脈において，初のろう者の学長を求める抗議運動であり，ろう者は障害者ではなく，マイノリティ・グループであることが主張された．その後，同運動が多岐にわたってもたらした影響には「ろう文化」観が反映されるものが多く存在しているが，そうした「ろう文化」観といったものは，DPN運動を機に突如あらわれたものではない．それは，DPN運動の背景に，ギャローデット「大学」と「ろう文化」の歴史的な関係があって初めてあらわれるものであった．具体的には，意図的では無かったにせよ，ギャローデット「大学」が，「教育方法」をもって「ろう文化」の中心価値であるアメリカ手話を維持し，「研究」をもって科学的にそれが言語であることを示したという，「大学」と「ろう文化」の関係があった．それによって初めて，DPN運動においてろう者のアイデンティティが主張可能となり，その後の影響に「ろう文化」観が反映されたということが本稿を通して明らかになった．従って「大学」と「ろう文化」の関係は，DPN運動後に生んだ影響の背景として，欠かせないものであった，ということが考察された．

本稿の残された課題としては，「ろう文化」の概念についてである．今回はDPN運動の歴史的背景に築かれてきた「ろう文化」に着目し，大学との関係を考察することを目的としたため，学問上議論されてきた文化概念としての「ろう文化」の複雑性については追及しきれなかった．今後は，その他の「障害文化」との相対点な視点を取り込みながら，将来ギャローデット大学が「ろう文化」をいかにして継承，発展させるのかについて，検討を続けていきたい．

註

[1] Gallaudet University “About Gallaudet”〈https://www.gallaudet.edu/about〉(accessed 30 November 2018)

[2] Gannon, J. R., *The Week the World Heard Gallaudet*, Washington, DC: Gallaudet University Press, 2009, p.15.

[3] ジョセフ・P・シャピロ『哀れみはいらない：全米障害者運動の奇跡』秋山愛子訳，現代書館，1999 年，131 頁.

[4] Jordan, I. K., “DPN and the Evolution of the Gallaudet Presidency,” in Greenwald, B. H & Van Cleve, J. V., ed., *A Fair Chance in the Race of Life: The Role of Gallaudet University in Deaf History,* Washington, DC: Gallaudet University Press, 2008, p. 181

[5] Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *Deaf President Now!: The 1988 Revolution at Gallaudet University*, Washington, DC: Gallaudet University Press, 1995.

[6] Bond, J., “From Civil Rights to Human Rights,” *Sign Language Studies*, 15–1, 2014, pp.10–20.

[7] Armstrong, D. B., “Deaf President Now and the Struggle for Deaf Control of Gallaudet University,” *Sign Language Studies*, 15–1, 2014, pp. 42–56.

[8] Jordan, I. K., *op. cit.*, pp. 170–187.

[9] クリステンセンとバーナートは，他の群衆運動が何の要求も認められない場合があることに対し，DPN 運動は要求の全てが承認されたことを「成功」と見出している．その上で成功要因を，①政治的・文化的思潮，②争点の種類，③抗議者達の有効性，④外部による支援，⑤イベントの一時的な進展，⑥環境的要因の 6 つに分類して提示しているが，歴史的な背景まではその要因として見出していない．Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, pp. 167–193.

[10] 先のデイビット・アームストロングの研究においては，DPN 運動が起こった背景として，ジョーダンを学長として任命するに至るまでのギャローデット大学の学長選出の経緯や歴史について簡単に言及されているが，それらは断片的な情報である他，彼自身の勤務経験に基づいた記述がなされている．そしてギャローデット大学がどのように「ろう文化」との関係を保っていたのかという立場からの考察はなされていない．*Op. cit.*, Armstrong, D. B.

[11] パディ・ラッド『ろう文化の歴史と展望：ろうコミュニティの脱植民地化』森壮也監訳，明石書店，2007 年，366 頁.

[12] Stokoe, W. C., Dorothy C. C. & Croneberg, C. G., *A dictionary of American sign languages on linguistic principles,* Washington, D.C.: Gallaudet College Press, 1965.

[13] 前掲，パディ・ラッド，367頁.

[14] ダグラス・C・ベイントン，ジャック・R・ギャノン＆ジーン・リンドキスト・バーギー『アメリカのろう者の歴史：写真で見る「ろうコミュニティ」の200年』明石書店，2014年，14頁.

[15] ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ『アメリカの聾者社会の創設：誇りある生活の場を求めて』土谷道子訳，全国社会福祉協議会，1993年，11頁.

[16] 同上.

[17] 同上.

[18] 前掲，ダグラス・C・ベイントン等，29頁.

[19] 前掲，ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ，50頁.

[20] 本稿では詳しくは述べないが，学問上論じられてきた「ろう文化」に対し，「ろう文化」を正確に定義する事はこの語の出所を見つけることに劣らず難しい等，「ろう文化」の文化としての存在を批判する者もいる．Erickson, W., Deaf culture: In search of the difference, *American Deafness and Rehabilitation Association*（ADARA）26, 3, 1992, pp. 47–50.

[21] パッデンは，「ろう」という言葉を使用する時，ジェームズ・ウッドワードによって提案された書き表し方に従っている．それは，聴覚学的な意味で，ただ耳が聞こえないというろう者の人々を指す場合は小文字のdeaf，他方一つの言語として（アメリカ）手話とひとつの文化を共有しているろう者（deaf）の特定のグループについて指す場合は大文字のDeafと表現される分類である．Woodward, J., “Implications for sociolinguistic research among the deaf,” *Sign Language Studies*, 1, 1972, pp. 1–7.

[22] パッデンは文化について以下の様に言及している．「文化とは，言語，価値観，行動規範，そして昔からのしきたりなどを有する，ある集団の人びとが学習して身につけてきた一連の行動である．」一方，コミュニティについては「ある集団の人びとがともに暮らし，共通する目的を共有し，相互の責任を果たしていく全般的な社会システムである．（中略）つまり人の信条や行動様式は主に所属する文化の影響を受けるが，仕事や多くの社会的な活動はかれが身を置くコミュニティの中で行われることになる．」と定義している．キャロル・パッデン「ろう社会とろう者の文化」1『アメリカのろう文化』シャーマン・ウィルコックス編，鈴木清史等訳，明石書店，2001年，14–15頁.

[23] 同上，15頁.

[24] 同上，16–31 頁．ここでいう「言語」とはアメリカ手話である．

[25] 同上，17 頁．

[26] 本書でパッデンは，「ろう文化」の最も際立った特徴として，ろう者（Deaf）の行動様式や信条を形成する「文化価値」を挙げている．その「文化価値」の中でも「言語」，アメリカ手話への敬意が，とりわけ重要であることを述べている．

[27] ろう者（Deaf）の「行動様式」としてパッデンが言及しているのは以下の様なものである．例えば，聴者が完璧に使用するために決して対等になれないことから，ろうの意思疎通には懐疑的とされる「発話」を極端に使用する事は，ろう文化においては「品が無い」と考えられている．また，聴者社会においては礼儀に反するとされているが，会話の間話し手の目をじっと直視することが，アメリカ手話を使用する者の間では普通でありマナーである．同上，22–28 頁．

[28] 本節は，前掲，ジョセフ・P・シャピロ，117–158 頁／Armstrong, D. F., *The History of Gallaudet University*, Gallaudet University Press, 2014, pp. 105–125／*Op. cit.*, Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N. を参照し，まとめている．

[29] Armstrong, D. F., *ibid.*, p. 94

[30] 前掲，ジョセフ・P・シャピロ，116–117 頁．

[31] 最終候補に挙がった二人のろう者は，当時ギャローデット大学の文芸学部長であり，中途失聴者であったジョーダン，そしてルイジアナ州全寮制ろう学校校長であり先天的ろう者であったハービー・コーソンであった．唯一の聴者の候補であったのが，北カロライナ大学グリーンスボロ校に勤めていたエリザベス・ジンサーである．

[32] Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, pp. 172–173.

[33] *Ibid.*

[34] 本稿の主旨から逸れる為に注に留めるが，DPN 運動では公民権運動の枠組みを採用した他，ギャローデット・コミュニティによって，マジョリティである聴者の抑圧からの「解放」としての枠組みも見出されていたという．ろう者は聴者による無知や冷淡さに，少なからず被害を被ってきた過去がある．ろう者の大学を，ろう者の代表者が治めることで，長年の聴者の代表者による統治から「解放」する．こうした意図を内部の者は持っていた．しかし，一般社会として支援をしてくれた聴者自身は，自らをろう者の抑圧者とは認識しておらず，かえって支援を失う恐れもあったため，聴者の抑圧からの「解放」という枠組みは，大きく報道されることは無かった．*Ibid.* p. 174

[35] 本節は，クリステンセンとバーナートによる研究をもとに整理している．*Ibid.*, pp. 194–219.

[36] Gallaudet University, *ANNUAL REPORT OF ACHIEVEMENTS October 1, 2016-September 30, 2017 FISCAL YEAR 2017*, p. 27,〈https://www.gallaudet.edu/Documents/Academic-Affairs/Annual-Reports/annual-report-FY2017.pdf〉(accessed 30 November 2018)

[37] Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, p. 200.

[38] *Ibid.*, p. 201

[39] Gallaudet University "Deaf President Now: Impact"〈https://www.gallaudet.edu/about/history-and-traditions/deaf-president-now/impact〉(accessed 30 November 2018)

[40] Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, pp. 205–206

[41] *Ibid.*, p. 206

[42] 2002年にもギャローデット大学ではDeaf WayIIが開催され，1万人のろう者が集っている．Jordan, I. K., *op.cit.*, p. 181.

[43] *Op.cit.* "Deaf President Now: Impact"

[44] Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, p. 215

[45] *The Washington Post*, March 9, 1988, p. A24

[46] Christiansen, J. B. & Barnartt, S. N., *op. cit.*, p. 54/Jordan, I. K., *op. cit.* p. 172

[47] Gallaudet, E. M., "The Milan Convention," *American Annals of the Deaf and Dumb,* 26, 1881, pp. 5–6.

[48] 口話主義による非難の結果，1920年にはろう児の80%が手話を使用せずに教育を受け，かつては寄宿ろう学校の教師の40%を占めていたろうの教師は15%未満に減っている．前掲，ダグラス・C・ベイントン等，73頁.

[49] ハーレイ・ラン『手話の歴史（下）：ろう者が手話を生み，奪われ，取り戻すまで』斉藤渡訳，築地書館，161頁.

[50] Gallaudet, E. M., "Report of the President on the System of Deaf-Mute Institution Pursued in Europe," 1867, p. 54.

[51] 前掲，ヴァン・クリーヴ＆バリー・クローチ，75–76頁.

[52] Armstrong, D. F., *The History of Gallaudet University, op. cit.*, p. 73/Atwood, A.W., *Gallaudet College: Its First One Hundred Years*, Intelligencer Printing Company, 1964, p. 137.

[53] *Ibid.*, p. 138.

[54] Armstrong, D. F., *The History of Gallaudet University*, *op. cit.*, pp. 70–73

[55] 教育事業研究局（the Office of Institutional Research）は，手話や指文字の教

授の為の撮影されたものを含む，教材の開発と評価に主に取り組むユニットであった．心理学研究局（the Office of Psychological Research）は，テスト開発に焦点を当てていたが，その後ろう者の人口統計学的研究を開始し，1966 年には人口統計学局（the Office of Demographic Studies）と改名された．聴覚・発話センター（the Hearing and Speech Center）では，聴力の欠損が音声や読唇術に及ぼす影響に関する研究，そして感覚コミュニケーション研究ラボ（Sensory Communication Research Laboratory）では，ろう者による音の知覚に関する基礎研究が行われた．これらのユニットを拠点にギャローデットの研究者は，伝統的にろう教育，及びろう者にとって重要な問題について焦点を当ててきた．*Ibid*., p. 74

[56] *Ibid*., p. 74

[57] Maher, J., Seeing Language in Sign: The Work of William C. Stokoe, Washington, D.C. : Gallaudet University Press, 1996, pp. 33–34, 37.

[58] 上野益男「エドワード・M. ガローデット（1837–1917）の聾唖者観（続）」『研究紀要』4, 1998 年，139 頁.

[59] E. M. ギャローデットはろう者に見合った教育手段としての「手話法」を最重要視していた．しかし実際の所，彼は同時に「口話法」を取り入れることの重要性も掲げ，ろう教育における「併用法」という，第三の立場に立脚していた．上野益雄「エドワード M. ガローデット（1837–1917）の聾唖者観」『研究紀要』3, 1997 年，167–168 頁

[60] 前掲，ダグラス・C・ベイントン等，73 頁.

[61] Armstrong, D. F., *The History of Gallaudet University*, *op. cit.*, pp. 75–76.

[62] *Ibid*., p. 76

[63] Atwood, A. W., *op.cit.*, p. 139.